

2024 優勝エッセイ賞
佳作(GⅢ)
受賞作

寂しいのは俺だけじゃない

後藤 朗夫



受賞のことは
私の記憶が正しければ、恐らく10年ぶりの入賞です。別に遊んでいただけではありません。毎年の恒例行事のように送っていました。これといったネタが無い時も、必死に絞り出して書きました。最近では、結果もほとんど気にしていません。誰かに読んでもらえることが、とても怖くて嬉しいからです。そんな折に今回の吉報。これも母からの贈り物かなと思っています。ありがとうございます。

プロフィール
本名 後藤朗夫
昭和40年8月27日生まれ
出身地 神奈川県川崎市
好きな騎手 吉田豊騎手
今年のベストレース(現時点) アルゼンチン共和国杯

2024年7月13日の土曜日。早朝の福島駅はどんより曇り空。

「暑いね。ここ」

セーラは持っていたペットボトルを飲み干した。去年もそうだった。真夏の福島は風が吹いてくれないのだ。暑さ凌ぎに駅前のコーヒーショップに逃げ込む。そこで朝食を済ませながら競馬新聞を広げた。

「ちょっと見せて」
セーラが凝視するのは、福島第1レースの馬柱表。彼女の勝負レースだ。

「9時半には着かないとね」
パドックと返し馬が見たいらしい。いつの間にそんなに詳しくなったの？

「貴方のせいでしょ」
私には返す言葉が無かった。駅前から路線バスに乗って、福島競馬場前で下車。

「すごい綺麗ね。川崎と全然違う」
致し方ない。セーラは川崎競馬場しか知らないのだ。川崎競馬場の関係者には申し訳ないが……。

先日、還暦を間近にして、私は久しぶりに一人暮らしを始めた。一緒に暮らしていた母が亡くなり、大きな一軒家に私一人になってしまったのだ。両親には申し訳ないが、私一人には広すぎる。この際、何もかも引き払うことにし

た。いい思い出も嫌な思い出も全てだ。今の私には1Kの賃貸アパートで十分なのである。

そんなアパートの隣の部屋に住んでいたのがセーラとペメラ。二人は姉妹だと言っていたが、全く似ていないし、そもそも肌の色が違った。私の顔を見ると逃げ出すセーラに対して、片言の日本語でニコニコと話しかけてくるペメラ。二人とも20代だと言いつ張っていたが、私は全く信じていなかった。

アパートの近くに一軒のコンビニがあるのだが、私が利用したのは一度だけ。男性店員の接客態度が余りにも横柄なのだ。言い方は悪いが、コンビニなんて腐る程にある。あそこには二度と行かないと心に決めていた。ある日、仕事で帰りが遅くなって、仕方なくそのコンビニに立ち寄った時だ。あの男性店員の姿は無く、レジ前には小柄な女性が立っていた。クビになったのかな。少しホッとした私は、さっさと会計を済ませるためにレジ前に立った。

「お帰りなさい」
店員姿のセーラが、今まで見せなかった笑顔で迎えてくれた。彼女の日本語は完璧だった。お陰ですぐにコミュニケーションが取れた。どうやら私は警戒されていたらしい。

「日本の男は嫌い。威張ってる」
セーラの口癖だった。何か嫌な思いをしたのだろう。詳しくは聞かなかったが。

「貴方は違った。優しいもん」
俺は優しくなんかないよ。ただ、寂しかっただけなので

す。ここ数年は、母の介護と仕事の両立で何も出来ませんでした。正直、キツかったです。その母が居なくなると、どこかでホッとしている自分がいました。やっと自由になれる。しかし、いざ一人になると、とてつもない孤独感に襲われたのです。アパートに帰っても誰も居ない。話をする相手も居ない。20代、30代だったら、まだ自分の未来を信じる事ができたけど、還暦間近の自分には無理です。

毎晩、胸が締め付けられそうです。誰でもいい。私の話を聞いてくれませんか。それがセーラだった。
女性と一緒に遊びに行くことなど、ここ数年無かった。セーラをどこに連れていけばいいのだろう。私の答えは川崎競馬場。何よりアパートから歩いて行けるのが有り難かった。めちゃくちゃ混むこともない。セーラが馬券を買うことはなかった。可愛い馬たちと私のつまらない話を肴にお酒を飲む。それだけで十分に楽しいと言っていた。

その日は珍しく日曜日に休みが取れて、朝から川崎競馬場にやってきた。そういえば、セーラを中央競馬の場外に連れてくるのは初めてだった。
「今日はお馬さんがいないのね」
最初は少し不満げだったセーラ。馬場内の芝生に寝転びながら、大型ビジョンを眺めていた。福島第1レースに出

走する馬たちがパドックを周回している。私は一旦、お酒を調達するためにその場から離れた。ビールとつまみを買って戻ると、セーラが芝生の上に仁王立ち。大型ビジョンを見上げていた。そこに映っていたのは、福島第1レースの障害未勝利戦。馬たちが次々と障害を越えていく。

「何これ」

そうか。セーラは障害レースを観たことが無かったのだ。彼女は、最後の一頭がゴールインするまで微動だにしない。そして、小さく手を叩いた。

「ファンタステック……素晴らしい」

何が彼女の心を捉えたのだろうか。私にとって、障害レースと新馬戦はお昼休憩の時間なのだ。

「ファンタステックでエキサイティングでビューティフル……そう思うでしょ」

分かるよ。分かるけど……。

「ライブで観たい」

残念ながら、川崎競馬場で障害レースが行われることはない。生の障害レースを観たければJRAの競馬場に行くしかないのだが、夏競馬が始まっているので東京も中山も開催していない。それを聞いたセーラは、真顔で私に詰め寄ってきた。

「福島に行きたい」

私にとって、福島競馬場は去年に続いて二度目になる。昨今の今頃、疲れ切った私を見兼ねて、週末に妹夫婦が母を預かってくれたのだ。その日、私は当てもなく新幹線に乗った。気付くと福島で降りていた。目の前で七夕賞をぶち当てた思い出の地。セイウンハーデスはあれ以来、姿を見せていないが元気だいるだろうか。

福島競馬場のパドックは屋内にある。天井が吹き抜けになっていて、晴れの日には御光が差すように見えるし、雨が降ると光を帯びた水の柱を馬たちが周回するように見える。

コンパクトで美しいパドックだ。その中を、第1レースに出走する8頭が周回する。福島名物、凍み餅をかじりながら新聞とにらめつこのセーラ。

「やっぱりバンくんね」

バンくん？

「バンくん……知らないの？」

バンくん……エツ、伴啓太？

セーラが初めて覚えたジョッキキーは、武豊でもルメールでも川田でもなかった。先週、デシマルサーガで後続をぶつ切った伴啓太騎手だった。今日の1レースでも3番、ローディアマントに騎乗する。パドックで輪乗りをする伴騎手が目の前を通る。

「意外とイケメン」

意外は余計である。

「伴くん！」

手を振るセーラ。素通りする伴騎手。

「無視されちゃった」

当たり前である。セーラはマークカードの書き方を知らない。私が一から教えないならなかった。3番の単勝を百円。セーラはその馬券を握りしめてゴール前に向かった。私は初めから見するつもりだった。軸馬が1つ目のハードルで落馬した時の虚しさといったら……。セーラはまだそれを知らない。しかし、彼女だけに馬券を買わせていいのか。お前はもう何年、競馬場に通っているのだ。逃げるのか？

ゲートが開くと、逃げる4番を伴啓太騎乗の3番がピツタリマーク。その隊列がしばらく続く。伴騎手が飛越をするたびに飛び跳ねるセーラ。恥ずかしいから止めてほしいと頼んでも聞いてくれない。そのうちに、近くにいた観客も面白がつて飛び跳ね出した。中山大障害で時々見る光景だ。もういいや。私も一緒に飛んでいた。すると、あれよあれよという間に3番と4番が並んで直線へ。

「伴くん！」

セーラの声援も虚しく、4番が先頭でゴール。伴騎手は惜しくも2着。悔しそうなセーラを尻目に、私は小さくガッツポーズ。隠れて3番の複勝を3000円も買っていた。280円もついている。リスクマネジメントの一環だったが、セーラの悔しがり方を見て、このことは黙っていた。後でご馳走してあげるから許してね。

「次は4レースね」

そう。今日は障害レースがもう一つ用意されていた。そちらにも伴騎手は騎乗予定だ。

「それが終わったら温泉に入ろう。汗でビショビショだもん」

そうですね。福島にはいい温泉が沢山あるもの。他にも買いたいレースがあるけど、今日は貴女の言う通りにします。そうだ。伴騎手で複勝転がしでもしようかな。旅立つ君への餞別を兼ねて。

「私とパメラ、もうすぐ国に帰るの。ママが寂しいんだって」

今朝、新幹線に乗車する間にそう打ち明けた。私は返す言葉が無かった。こういう場合、なんて言うのが正解なんだ？お願いだから行かないでくれて、このオッサンに跪けとでも言うのか？

「私が居なくなったら寂しい？」

「……」

私は答えなかった。本当に言葉が見つからなかったのだ。座席に腰掛けている間、セーラはずっと私の手を握っていた。そのお陰で冷静さを取り戻せたのかもしれない。福島に着いた時には吹っ切れていた。セーラにだって家族がいる。寂しいのは私だけではないのだと……。

さあ……伴騎手よ。心置きなく飛んでくれ。そして、無事にゴールしてくれ。セーラと私も一緒に飛び跳ねるから。